



巻 頭 言

山間地農業・農村活性化への期待

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事長 今井良衛
北 陸 支 部

炭焼きの山の煙りは秋から初冬の風物詩であるが、その煙りが立ち昇らなくなって久しい。そして、炭焼きの木を伐らなくなってから、山菜や茸が取れなくなっている。また、過疎となり集落ごと町へ移住すると、タヌキなどの小動物も一緒に町に下りてくるという。

近年、山間山添地で熊、猪や猿などによる農作物の被害が多発している。これは、動物の密度（頭数）の増加と人間の乱開発の影響のために云われているが、果してそれだけだろうか。

新潟と福島の間境の山間地の村では、昭和35年頃まで、沢田の一番奥（上手）の水田で「うさぎ田」と呼ばれる、集落が共同で管理する田があったという。「うさぎ田」とは、山の動物達に秋の稔りを提供するための水田で、農作物の被害を軽減し、人間と動物達との共存関係を作っていたのである。

ところで、新しい食料・農業・農村基本法に基づいて、平成12年度から中山間地域農業に対する直接支払制度が新設される。この制度の目的は、中山間地域の農地が果たしている国土保全、洪水防止、水源涵養といった機能の維持などである。農業・農村の多面的価値を認めたところに意義があるといえよう。

我が国の農地は500万haあるが、平地以外を指す広義の中山間地域の農地はおよそ200万haと云われている。今回の直接支払制度の支給対象農地は、急傾斜農地と緩傾斜農地に別けられ、それぞれ水田、畑、草地、採草地、放牧地などに区分され10a当り単価が決められている。また、支給対象者は農業の生産活動と土壌流出防

止、周辺林地の管理、景観作物の作付け、鳥のえさ場の確保、環境保全活動など多面的機能増進の活動を行う農業者・農業生産組織となっている。

経済の高度成長とともに、農業は生産効率の低い産業として批判されてきた。しかし、農業は自然の営みのなかで成立しているのであるから、経済効率一辺倒の農業展開には自ずと歪みや限界を生ずることになる。

自然界では一見無駄と思われることでも、大切な役割を担っていることがある。蟻の社会では、よく働く蟻と普通に働く蟻と働かない蟻が6対3対1の割合で構成されているという。実験的に働かない蟻を排除すると残りの蟻が6対3対1に再配分され、働かない蟻が出てくるのだそうだ。働かない蟻であっても、蟻社会にとって何か大切な役割を果たしているのであろう。

中山間地では、過疎化が進み農耕地の耕作放棄も多発している。農業生産面から見れば、生産力の低い地域ではあるが、多面的な環境保全機能を考えると極めて大切な役割を果たしている地域でもある。米の総生産額は3兆円余りだが、水田だけでも多面的機能を換算すると12兆円弱になる。中山間地域農業に対する直接支払制度が、我が国の山間地域農業・農村の活性化の起爆剤となることを期待したい。

そして、今後は農業の技術開発においても、中山間地の農耕地（小区画、不整形、傾斜地）向きで、高齢者や女性でもできる小型・軽労働の管理技術体系や、それに対応する農薬の開発が求められるのではなかろうか。